

村落内身分の地域類型と讃岐国詫間荘

藺 部 寿 樹

はじめに

宮座の一形態である名主座は、一四世紀初頭ごろに成立した、名主頭役身分の者たちが結集した村落内身分集団である。名主頭役身分とは、名主職の所持をもとに宮座である名主座の頭役を勤仕する者の村落内身分である。村落内身分とは、村落集団によりおのおの独自に認定・保証され、一義的にはその村落内で通用し、村落財政により支えられた身分体系である。^①

この名主座は、従来、中国地方特有の宮座とされてきた^②。しかし、中国地方のみならず、四国地方、北九州地方、さらには中部地方にも、名主座が存在する可能性がでてきた^③。

讃岐国は、名主座分布の南限に位置する可能性が高い。そこで本稿では、四国地方、讃岐国における名主座分布のありかたを追究したい。本稿で検討する具体的な事例は、讃岐国三豊郡詫間荘における宮座である。

詫間荘は、一二五〇（建長二）年までに九条家領として立荘された^④。荘域は、荘鎮守浪打八幡宮の祭祀圏からみて、近世の吉津村、中

村、比地村、仁尾村（仁尾上村）及び詫間村の五ヶ村に及んでいたものと思われる。

詫間荘の惣荘鎮守社として、詫間村八幡山に浪打八幡宮がある^⑤。また詫間荘内の仁尾村には、仁尾賀茂神社がある。この仁尾賀茂神社は仁尾村の鎮守社であるが、個別村落鎮守社というよりも、準惣荘鎮守社的な存在である（この点については後述する）。

詫間荘の現地に伝来する史料としては、浪打八幡宮別当検校であった宝寿院が旧蔵していた文書群がある。この宝寿院旧蔵文書は、地元の古文書収集家であった片岡貞良氏の手を経て、現在二ヶ所に分有されている。

そのひとつは、瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書である。この分は、『香川県史』第八巻に瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書として翻刻されている^⑥。

いまひとつは、『香川県史』第八巻に片岡貞良氏所蔵宝寿院文書として翻刻されているものである。これは現在、香川県立文書館に片岡氏収集文書として架蔵されている。この片岡氏収集文書は文書カードにして約三千枚に及ぶ膨大な文書群であり、宝寿院旧蔵文書と思われるものはそのごく一部に過ぎない。本稿では、『香川県史』第八巻翻刻の片岡貞良氏所蔵宝寿院文書のみならず、今回新たに見出した片岡氏収集文書も利用する^⑦。

また詫間荘内仁尾村には、仁尾賀茂神社文書・覚城院文書・常德寺文書がある。仁尾賀茂神社文書及び覚城院文書（中世分）は現在、香川県歴史博物館に寄託中である^⑧。

一 浪打八幡宮の名主座

まず、惣荘鎮守である浪打八幡宮の宮座についてみてみよう。

【史料A】

比地村

一番 安行	二番 黒王	三番 守弘
四番 清追	五番 小三郎	六番 助房
七番 吉光	八番 糸丸	九番 貞門
		十番 包松

中村分

一番 宗国	二番 真守	三番 友成
四番 重光	五番 吉真	六番 安弘
七番 成松	八番 末守	九番 国正

(中略)

吉津詫間仁尾分十二年廻

一番 則永	助宗	守永
二番 経正	西光	則方
三番 真光	宗久	金武
四番 則久	時延	宗吉
五番 為弘	吉松	武経
六番 依国	行真	宗藤
七番 則包	近光	土用
八番 是時	国光	定宗
九番 光永	正光	友行

十番 秋弘 真光 久則

十一番 正光 元 為時 吉久

十二番 延正 末次 宗成

浪打御放生会御頭所^⑨

この史料Aにみえる「秋弘」などは、「名」である^⑩。すなわち、浪打八幡宮の放生会は、吉津村・詫間村・仁尾村分三名一組で一二番、比地村一〇名で一〇番、中村分九名で九番により勤仕されていた。このように、名によつて「御頭」が勤仕されているところから、浪打八幡宮の宮座は名主座であつたことがわかる。

史料Aは写で、中略部分に「正元八永正六配マテ五十一年二成也」とあるところから、原文書の年紀は一五〇九(永正六)年と思われる^⑪。それでは、浪打八幡宮名主座はいつごろ成立したのであろうか。

【史料B】

(端裏書)

「八幡宮 御放生会駕輿丁并義量等神判 写」

八幡宮 駕輿丁次第之事

一御輿 吉津 正元 比地 包末 左
吉津 右 詫間 吉久 右

二御輿 比地 依国 詫間 久則 左
吉津 糸丸 右 吉津 守永 右

三御輿 比地 助宗 詫間 則包 左
吉津 安行 右 吉津 為時 右

吉津 貞久 右

義量 左 宗友 則久 右
 太鼓夫仁尾二在二人宛
 一番 宮時 貞宗 宗成
 二番 友行 金武
 右、社務供僧中檢校雇頭神人有会合定之、以此補之面可勤仕者也、
 若背此旨者、可處罪科也、仍所定如件

明德二年 己未 八月九日定之
 檢校在判
 惣官在判^②

史料Bは、浪打八幡宮放生会の駕輿丁と太鼓夫の勤仕を定めたものである。そしてこの勤仕は名によつてなされている。この文書そのものは名主座の存在を示す頭文ではないが、他の事例では名主座は一四世紀初頭には成立しており、浪打八幡宮では一六世紀初頭の頭文がみられる。これらの点から、少なくとも史料Bの一三九一（明德二）年までには浪打八幡宮の名主座は成立していたものとみてよからう。

浪打八幡宮は詫間荘惣荘鎮守社であると前述したが、それに関して次の史料をみてみよう。

【史料C】

定

八幡宮年中行事番帳之次第

一番 詫間 智蔵坊 詫間 中蔵坊
 二々 玉泉坊 詫間 宝寿坊

三々	地福寺	詫間	西楽寺
四々	北之坊	詫間	善勝寺
五々	大福寺	詫間	幸蔵坊
六々	普門坊	詫間	田満坊
七々	妙樂坊	詫間	千光寺
八々	日天寺	吉津	龍蔵寺
九々	大光寺	城徳寺	
十々	大林寺	吉津	増宝坊
十一々	常福寺	詫間	多門坊
十二々	南之坊	詫間	安樂坊
十三々	西蓮寺	比地	玉蔵坊
十四々	宝善坊	詫間	愛光坊
十五々	東光坊	詫間	定智坊
十六々	石堂寺	地蔵院	
十七々	南台坊		

右守番帳之旨、無懈怠、可被勤仕者也、仍衆儀所定如件

貞治六年二月十八日定之^③

史料Cは、一三六七（貞治六）年二月の浪打八幡宮年中行事番帳の写である。これによると、詫間荘内の詫間・吉津・比地にある諸寺院坊舎が番を組んで、浪打八幡宮の年中行事に奉仕している。ここにて

てくる諸寺院坊舎が、史料Bにみえる「供僧中」なのであろう。この供僧中は本来一二口であった^④が、史料Cの一四世紀には新加の供僧により、その数はその倍以上にふくれあがっていたものといえよう。

この浪打八幡宮供僧中は、詫間荘全域ではないが、詫間・吉津・比地と荘内の複数の地域に分散していた。その点で、浪打八幡宮は惣荘鎮守社であるとともに、詫間荘全荘の宗教的センターの役割も担っていたものと思われる。

また、この供僧中の年中行事結番奉仕が、浪打八幡宮祭祀儀礼の宗教的な指導性を担っていたと思われる点にも注意したい。

史料Bでは、「社務供僧中・検校・雇頭・神人有会合定之」とあり、検校と惣官が署判している。社務は神職で、署判している惣官がこれにあたる。検校は供僧の代表的存在であろう。雇頭・神人は名頭役を勤仕する名主のことを意味するものと思われる。したがって、浪打八幡宮名主座の運営は、社務・検校・供僧・名主の合議でなされており、そのなかでも特に史料Bに署判している社務(惣官)と検校が指導的な役割を担っていたものと思われる。こうした社務・検校を中核とする祭祀運営の背景に、供僧中による宗教的儀礼の実施があったものといえよう。

ところで、史料Bの一三九一(明德二)年には、詫間・吉津・比地・仁尾にわたって一九の名がみえる。

また一五〇九(永正六)年と思われる史料Cの頭文には、詫間・吉津・仁尾・比地・中村にわたって三六の名がみえる。そこで次の史料をみてみよう。

【史料D】

詫間十二名

宗久 則久 吉松 宗藤 則包 国光 正光 久則 吉久 末次
則永 則方

吉津仁尾廿四名吉津十九名
仁尾五名

真光 時延 宗吉 為弘 武経 依国 行真 近光 土用 是時
光永 秋弘 真光 正元 為時 延正 助宗 守永 経正
仁尾

金武 定宗 友行 宗成 西光

中村九名

吉真 安弘 成松 末守 国正 宗国 真守 友成 重光

比地邑十名

助房 吉光 糸丸 貞門 包松 安行 黒王 守弘 清追 小三

良

五箇村合五十五名^⑤

史料Dは、年紀未詳であるが、中世の名主座の状態を示すものと思われる。それによると、詫間・吉津・仁尾・比地・中村にわたって五五名みえる。すなわち、史料Cの三六名から史料Dの五五名に増加しているのである。この五五名という数は、近世初頭において規範的な数とされているから、浪打八幡宮名主座の中世における最大の名数であるといえよう。

この名数の増加は、他の名主座の事例からみて、本名(旧名)をもとに、新名(小名)が新規加入していったことによるものと思われる。そこには、台頭する新名の勢力を取り込むことで、名主座の維持発展をはかっていた流れをみることができよう。

またそれにもない、名頭の勤仕方式も整備されていたものと思

われる。史料Dでは、詫間の一二名、吉津・仁尾の二四名、中村の九名、比地の一〇名という形で各々括られている。名主屋敷の所在地などをメルクマールに村ごとに名を整理したのである。ここから、中世（末期）には、詫間、吉津・仁尾、中村、比地の四グループから名頭がだされていたものと思われる。このように浪打八幡宮名主座において、名頭勤仕の方式に名の所在地Ⅱ個別村落という区分を導入したことは、近世への展開において少なからぬ影響をもたらしたものと考えられる（この点については、後述する）。

ところで、国島浩正氏は次のように述べている（括弧内は蘭部による）¹⁶⁾。

（浪打八幡宮の）祭祀に参加する村々は、詫間と熊岡二郷五カ村におよんでおり、おそらく荘域をはるかに越えていたと思われる。萩原氏のいわれる郷宮座の段階に達しているわけである。こうした祭祀を通じての五カ村の結びつきが何時頃成立したのかは不明だが、その背景には農村の自治と結合の発展があったとみることができよう。

この国島氏の見解は、名主座の本質を理解していない議論である。名主座は、荘園の名を単位とする組織である。詫間荘の名の形成が名主座の前提であり、個別村落の成立はそれに続くものである。詫間、吉津、仁尾、中村、比地五ヶ村のうち、比地が熊岡郷内に比定されるとしても、それは一二五〇（建長二）年かそれ以前における詫間荘立荘の過程で、荘域が郷域を越えていたためと判断すべきである。

ただし、国島氏のような誤解が生じる余地は、浪打八幡宮名主座のありかたにうかがえる。前述したように、浪打八幡宮名主座では中世

の段階から名を個別村落ごとに括って位置づけていた。これはまた、惣荘名主座のもとで、個別村落が発展してきた証左でもある。

しかし、このような個別村落の発展・台頭は、国島氏の見解とは裏腹に、惣荘名主座をそのまま支えする基盤ではなく、名主座の変質を促進する要因になっていったのである。この点については後述するとして、次に詫間荘内の仁尾賀茂神社をめぐる問題について考えてみたい。

二 浪打八幡宮と仁尾賀茂神社

浪打八幡宮はこれまで述べてきた通り、惣荘の名主座である。

確実に中世に遡る事例としては、讃岐国井原荘における冠尾八幡宮や備前国（のち讃岐国小豆島の）草加部荘における草加部八幡宮に、名主座があったものと推察できる。これらの事例については、今後詳しく考察する予定である¹⁷⁾。

このように、讃岐国は基本的に名主座分布地域と判断してよいように思われる。

そのなかで注目したいのは、詫間荘仁尾浦に鎮座する仁尾賀茂神社である。

【史料E】

仁保浦鴨大明神御前之まつり^{（之カ）}覚之事

文禄貳年二閏菊月拾五日

但前々のかたきのまつりなり、右後日如件

仁保年寄中¹⁸⁾

この文書によると、中世の仁尾賀茂神社では「仁保年寄中」による祭祀がなされていたことがわかる¹⁹⁾。それでは、この年寄中というのは、どのような存在なのであろうか。

【史料F】

(前略)

一 御宮さいかうなとの御時、万事年寄衆被仰次第二可仕事

一 祭礼御まつり、如先例□、供祭人衆被仰次第二可仕事

一 まつり之時、神子、大夫分、口之儀、如先例之、可仕事、付り、重而何にてもいつわり申間敷事

右之通、少も相背申候ハ、何時二ても、御奉行様へ被仰上テ、

我等越度二相極候ハ、大夫被召上ケ候様二可被成候、為其一札如件

寛永拾年

二保ノ

三月十七日

大夫[㊟]

御氏子衆

鴨大明神様御年寄衆

覚城院様[㊠]

史料Fによると、仁尾年寄衆というのは、いわゆる宮年寄であることがわかる。宮年寄とは一般的に、祭祀集団において年長または臈次が上位で、祭祀を主導する立場にある者のことをいう。史料Fで仁尾賀茂神社の宮年寄が祭祀を主導していることがわかる。このことから、仁尾賀茂神社の祭祀組織が臈次階梯をとまなう宮座である可能性がうかがえる。そこでさらに次の史料に注意したい。

【史料G】

〔義經〕
「加茂社御頭心得惣記録」

加茂社御頭心得惣記録

一 八月朔日御蘭戴千承人々社頭ヨリ呼二参候間、早速袴羽織二而

宮座え罷出、年寄衆より御蘭戴候趣承り罷帰可申事

(中略)

文政十二年己丑九月[㊡]

史料Gでは、仁尾賀茂神社の祭祀組織が明確に「宮座」と表現されている。宮座の史料表記そのものは宮座の存在証明として必須なものではないが、重要であることには違いない。

そしてさらに注目すべきなのは、頭人が「御蘭」で差定されていることである。名主座では一般に頭文が作成されており、頭文またはその関連文書等に決められた順番で名主座の名頭は勤仕される。一方、畿内近国における臈次成功制宮座の頭役は、臈次の順か、または神意による蘭引きにより差定されるのである。

第二次大戦前の仁尾賀茂神社宮座は、塩田・鴨田・河田・倉本の四苗(みょう) (及び後に加わったとされる吉田をいれて五苗) のみの家による頭屋で運営されていたという[㊢]。この五苗の家が三百軒あり、そこから五人の頭屋を蘭引きで選任する。また同じく仁尾の八幡宮宮座も一二苗の輪番制で運営されていた。苗はオヤ(本家筋)を中心にまとまっている。

この苗が「名」の名残である可能性もあるが、仁尾の場合はそのようには解釈しがたいように思われる。仁尾賀茂神社宮座の五苗は、通例の名主座の名の数より著しく少ない(ただし名数は、名主座の決定的な要件ではない)。また仁尾八幡宮宮座の一二苗は、オヤを中心

とする同族的集団である。仁尾賀茂神社の苗も塩田・鴨田・河田・倉本・吉田という苗字に固定されている。そこから、仁尾賀茂神社・仁尾八幡宮いずれの苗も、名ではなく同族を意味するものと解される。したがって、近世近代の苗による仁尾賀茂神社・仁尾八幡宮宮座はいずれも、臈次成功制宮座が変質したものとえよう。この変質とは、臈次成功制宮座が近世以降、家単位の宮座になったことを意味する。

以上のように、宮年寄すなわち臈次が存在すること、宮座という史料表現、及び「御鬺」による頭人差定という点から、仁尾賀茂神社の宮座は、臈次成功制宮座であるとみてよい。そしてそれは史料Eの記載のように、仁尾賀茂神社の臈次成功制宮座は少なくとも中世後期に遡るものと思われる。

そこで、何故、名主座分布地域の讃岐国に、それも惣荘名主座がある詫間荘内において、臈次成功制宮座が存在するのかが、問題である。この問題を解くために、詫間荘における仁尾浦（仁尾村）及び仁尾賀茂神社の位置づけについてみておこう。

まず注意したいのは、仁尾賀茂神社に免田が存在したことである²⁵。これは、仁尾賀茂神社が仁尾浦（村）の神社でありながら、詫間荘全体としても重要な神社であったことを意味している。

浪打八幡宮は全荘的な存在の名主座であるが、詫間荘のすべての名を網羅したものではなかった。仁尾浦（村）には、浪打八幡宮名主座に編成されていない名として、金武名・武延名・延包名の三つの名があった²⁶。前述したように仁尾賀茂神社は名主座ではないので、これらの名が直接、仁尾賀茂神社宮座と関係するわけではないが、詫間荘における仁尾浦（村）のありかたを考えるうえで、浪打八幡宮名主座

に編成されていない名が仁尾浦（村）に存在することに注意しておきたい。上記のような荘内事情もさることながら、詫間荘における仁尾浦（村）のありかたをもっとも鮮明に示すのは、京都の鴨社との関係である。先行研究²⁷によると、一〇九〇（寛治四）年に鴨社供祭所として讃岐国内海が指定された。この讃岐国内海は仁尾浦の津多島のことである。その関係から仁尾に賀茂神社が勧請された。この仁尾の浦人が仁尾賀茂神社の供祭人となったのである。鴨社の仁尾浦支配は、供祭人すなわち人を通しての支配であったから、詫間荘の荘園支配と併存できたのであろう。すなわち仁尾賀茂神社の宮座成員は、鴨社供祭人であり、詫間荘荘民でもあったのである。

仁尾賀茂神社の鴨社供祭人は、京都の鴨社に供物をおくる義務をもつとともに、同社の保護のもと、供祭を背景とした仁尾浦漁撈や舟運の特権を独占したものである。一四一五（応永二二）年、讃岐国守護細川頼之から海上諸役や兵船の供出を命じられていること²⁸からみて、仁尾浦供祭人の活動は中世後期においても継続していたものといえよう。

このように仁尾浦が漁撈や海上交通の基地であったことと、名主座地帯・讃岐国において、また詫間荘惣荘鎮守浪打八幡宮名主座のもとで、仁尾賀茂神社宮座が臈次成功制宮座であったことは、深い関連をもつものと思われる。

出雲国八束郡美保関の美保神社には、出雲地方としては特異的に畿内近国的な臈次成功制宮座が遺っている。この点を和歌森太郎氏は、美保関が日本海海上交通の要衝であり、その関係で京風文化が伝播したものとみている²⁹。

出羽国櫛引郡黒川村の四所明神（現春日神社）の宮座も、黒川能（王祇祭）という、出羽国で特異な京風の能座で有名である。この黒川能は、戦国期の領主・武藤氏が京から能役者を連れてきたことに由来するとの伝承がある²⁸。また黒川村のある庄内地方は最上川及び日本海海上交通との関連も深い。京風の能座が成立・維持されたことの素地に、日本海海上交通を通しての上方文化の影響があつたものと思われる。

出雲国や出羽国を村落内身分の地域類型のなかでどのように位置づけるかはこれからの課題であるが、ここでは流通関係などを背景として畿内近国の臈次成功制宮座が遠隔地に伝播する事例が希有ではないことを確認したい。

このことから、讃岐国の名主座分布地域において、仁尾賀茂神社の臈次成功制宮座が成立したのは、京都鴨社との関係を背景とする、賀茂供祭人の活動によるものと想定したい。そして、このように浪打八幡宮惣荘名主座と異なる、当該地域で特異な祭祀形態を確立したことが、仁尾賀茂神社の独自なありかたを際立たせたものと考ええる。

そして、以上のような仁尾浦及び鴨社供祭人の特異性からみて、仁尾賀茂神社は単なる個別村落鎮守社にとどまらない、より広範囲に影響を有する存在と思われる。その点から、本稿では仁尾賀茂神社を準惣荘鎮守社的な存在とみたわけなのである。

惣荘鎮守社には名主座、準惣荘鎮守社には臈次成功制宮座というように、詫間荘内には異なるタイプの宮座が併存していた。このように一つの荘園に二つのタイプの宮座が併存している事例は、詫間荘だけではなく。丹波国山国荘も詫間荘同様、名主座と臈次成功制宮座とが

併存しているのである²⁹。

丹波国は、名主座分布地域と臈次成功制宮座分布地域の接点に位置している、一方、讃岐国は、名主座分布地域の外縁部にあたる可能性が高い。このように、それぞれの事情は異なる。しかし、一つの荘園に二つのタイプの宮座の併存するというのは、村落内身分の地域類型における辺境地帯の特徴なのではないだろうか。異なる宮座類型の併存・混在という事象は、今後、村落内身分の地域類型の追究を続けていくうえで、注意すべき点であろう。

三名主頭役身分から郷村頭役身分へ

次に中世名主座が近世にどのように変わっていったのか、浪打八幡宮名主座の行方をたどってみたい。

史料Bでみたように、一三九一（明德二）年の段階で既に浪打八幡宮名主座の名は、村ごとに区分けして表示されていた。このことは、一四世紀後期には個別村落が自立していたことを意味する。中世後期における個別村落の自立は一般的な現象であるが、注意すべきなのは、それが浪打八幡宮名主座の名のありかたにも影響を与えている点である。

これまで筆者が調べてきた名主座でも、もちろん中世後期に個別村落は形成している。そしてそれによつて、準惣荘鎮守社や個別村落鎮守社に名主座が形成している事例もあった。そして浪打八幡宮名主座の場合は、惣荘名主座の名がそれぞれの個別村落における名という形で整理されているのである。そこには、詫間荘の名というよりも、吉

津村、中村、比地村、仁尾村（仁尾上村）及び詫間村それぞれの名という觀念が強く看取される。すなわち、惣莊名主座である浪打八幡宮名主座の名は、「個別村落の名」の集合体というありかたを示しているのである。

このようなありかたについては、前述したような詫間莊内における仁尾浦（村）の独自の動きが強い影響を与えているのではないだろうか。村（浦）として自立的な仁尾浦（村）のありかたが、他の吉津村、中村、比地村及び詫間村の自立化を促したのではないかと思われる。それがさらには惣莊名主座の名のありかたにも影響して、浪打八幡宮名主座を「詫間莊の名」の集合体ではなく「個別村落の名」の集合体という形にしたのではないだろうか。

【史料H】

覚

高四拾石

一五町七反四畝拾歩

生駒様御代より御免許御証文御座候

（中略）

右之通浪打八幡宮社領分二而御座候、以上

詫間村

檢校

明和六年

丑七月六日

庄屋

惣十郎殿^⑩

史料Hは、一七六九（明和六）年に浪打八幡宮檢校宝寿院が詫間村庄屋に社領の内容を伝えた覚書である。これは詫間村に限ったことではないが、近世にはいつて浪打八幡宮が社地を独自に管理することは困難になり、庄屋の干渉を受けるようになる。これは、惣莊鎮守社の名主座が次第に政治的イニシアチブを失っていく過程を象徴的に示すものである。

このような動向のなかで浪打八幡宮の名主座は変質を余儀なくされる。

【史料I】

豊後

相模

浪打八幡宮旧例書

浪打八幡宮神方旧例有来之次第

一 毎年八月祭礼二五ヶ之頭人方へ門注連おろし二御前人三右衛門柳を持進、五ヶ村之村頭人方へ参、門注連八月朔日二おろし申

次第

一番 吉津村

二番 中村

三番 比地村

四番 仁尾村

五番 詫間村

右之通仕来り申候

一 八月三日四ヶ之村頭人詫間之頭人方へ寄合、神事有来之相談仕、

詫間頭人より四ヶ之村頭人を振廻申候、右之通、毎年仕来り申候

一八月十日八幡宮御はけおろし、所かざり仕、檢校説言上ヶ御へ
い三右衛門請取、社人頭人共頂戴仕次第

中村

一番 豊後

同村

二番 相模

三番 吉津村頭人

四番 中村頭人

五番 比地村頭人

六番 仁尾村頭人

七番 詫間村頭人

八番 同村惣大夫

右之通頂戴仕候、其上二檢校上座二而右之次第二座を作り、檢校
より御かわらけ始り連座次第第二御酒頂戴仕候而宮ヲ披申候

(中略)

未ノ

中村社人

八月廿二日

豊後 判

同村社人

相模 判

中村豊後・相模相談、兩人旧例書仕、吉田へ指上候へ者、御帰被
成、拙僧二、三人之社人役付旧例書付候へと被仰出、書付指上候、
則吉田二留り、其返二被仰付候

檢校理嚴^③

史料Ⅰは年紀未詳、未八月の文書である。浪打八幡宮中村社人であ

る豊後・相模兩人の社務に関する係争に関する文書^③からみて、この
未八月は一六九一(元禄四)年八月でまちがいない。ちなみに一七世
紀の社務をめぐる係争の中で、宝寿院檢校はリーダーシップを強化し
て、「別当」と自称するようになる^③。

さて史料Ⅰで注意したいのは、浪打八幡宮名主座の頭役が吉津村頭
人、中村頭人、比地村頭人、仁尾村頭人、詫間村頭人というように、
村ごとの頭役として勤仕されている点である。これは、各村ごとにそ
れぞれ頭人を選出して、その村の頭人が頭役を勤仕する祭祀形態であ
る。このような形態の宮座を、ここでは「郷村頭役宮座」と呼んでお
こう。後述するように、中世でも(郷)村単位で宮座頭役を勤める事
例がある。そのような中世の事例をも含意して、郷村頭役宮座の概念
を規定しておく。

一六四五(正保二)年に駕輿丁を名ごとに昇ぐ方式を確認している^③
ので、一七世紀中期までは、名主座の形態が維持されていたものと思
われる。それが一七世紀後期には郷村頭役宮座の形に変わったわけだ
ある。

この変化の徴候は、名主座時代に既に胚胎していた。すなわち前述
したように、浪打八幡宮名主座は「個別村落の名」の集合体という形
をとっていたのである。そして、近世には個別村落の自立を背景とし
た庄屋の土地支配を鎮守社は甘受するに至る。個別村落の自立性が、
名主座を郷村頭役宮座に変化させたものといえよう。

このような郷村頭役宮座を、単なるトウヤ祭祀として、宮座とみな
さない見解がある。しかし、以上のような沿革からみても、郷村頭役
宮座を宮座とみなして何ら問題はないといえよう。

なお、浪打八幡宮でも近世から百手神事をおこなっているが、その百手頭人もやはり郷村頭役としておこなわれている^⑤。

近世浪打八幡宮における郷村頭役宮座の内実、すなわち各村で頭役を勤仕する階層の範囲や頭役差定のありかたなどは、史料上、不明である。しかし、名主座から郷村頭役宮座に変質した一七世紀後期では、各村の名主家継承者が頭役を勤めたであろう。そして近世を通して、頭役勤仕者はより広い階層に拡がっていったものと推測する。

各村落でこの郷村頭役宮座の頭役を勤める身分階層を、「郷村頭役身分」と規定したい。郷村頭役宮座は、郷村頭役身分が結集する村落内身分集団なのである。

実は、(郷)村単位で頭役を勤める事例は、中世でもみられる。そこで中世・近世を含めて(郷)村単位で頭役を勤めた村落内身分を一括して、郷村頭役身分として概念規定しておく。ただし、近世の郷村頭役身分は中世と異なり家格制に規制されたものであることに留意し、特に「近世郷村頭役身分」と呼んでおく。

浪打八幡宮の名主頭役身分は、一七世紀後期に家格制に基づく近世郷村頭役身分に変質したもののといえよう。

おわりに

詫間荘における村落内身分に関して、次のようにまとめることができる。

①詫間荘惣荘鎮守社である浪打八幡宮の名主座は、一四世紀後期までには成立していた。

②中世の浪打八幡宮名主座の運営は、社務(惣官)と検校が指導的な役割を果たしていた。

③詫間荘準惣荘鎮守社である仁尾賀茂神社宮座は、京都の鴨社との関係から、騰次成功制宮座であった。

④畿内近国の騰次成功制宮座においては、流通関係などを背景として遠隔地に伝播する事例がみられる。

⑤一つの荘園に二つのタイプの宮座の併存するというのは、村落内身分の地域類型における辺境地帯の特徴と思われる。

⑥浪打八幡宮の名主頭役身分は、一七世紀後期に家格制に基づく近世郷村頭役身分に変質した。

⑦郷村頭役宮座は、単なるトウヤ祭祀ではなく、宮座である。

今後も、名主座の分布地域などを究明することにより、村落内身分の地域類型を解明していきたい。

注

(1) 藺部寿樹『日本中世村落内身分の研究』(校倉書房、二〇〇二年、終章)、同『村落内身分と村落神話』(校倉書房、二〇〇五年、第二章)。

(2) 宮本常一「岡山県御津郡加茂川町円城の祭祀組織」(『宮本常一著作集一一巻 中世社会の残存』、未来社、一九七二年、所収「初出一九五四年」)、肥後和男「美作の宮座」(和歌森太郎編『美作の民俗』、吉川弘文館、一九六三年、所収)、藤井昭『宮座と名の研究』(雄山閣出版、一九八七年)。

(3) 藺部寿樹「名主職と名主頭役身分—安芸国久島郷を中心に—」

『米沢史学』二三号、二〇〇六年）、同「周防国賀保荘における名主座について」（『米沢史学』二三号、二〇〇七年）、同「備後国杭荘における名主座について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』掲載予定）、同「村落内身分の地域類型と丹波国山国荘」（『天皇家領山国荘の研究』（仮題）、高志書院、二〇〇九年刊行予定、所収）。

(4) 国島浩正「中世における浪打八幡の祭祀組織」（『香川史学』五号、一九七六年）、石田祐一「諸大夫と撰閑家」（『日本歴史』三九二号、一九八一年）。なお、古代には詫間牧という官牧があり、八六五（貞観七）年に廃止されたことが確認できる（日本三代実録貞観七年一二月九日条、『新訂増補国史大系』所収）。

(5) 浪打八幡宮が詫間荘惣鎮守社である徴証として、ここでは近世の歴史書『全讃史』の記述を指摘しておく（全讃史巻之六 神祠志下、『復刻讃岐叢書第一 国訳全讃史』、藤田書店、一九七二年、二四四頁）。また、詫間町誌編纂委員会編『詫間町誌』（詫間町、一九五二年）及び詫間町誌編集委員会編『新修詫間町誌』（詫間町、一九七一年）も参照のこと。

(6) 『香川県史』第八巻資料編古代・中世史料（香川県、一九八六年）。瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書については、同書に記載された文書番号で示す。

(7) 香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書の翻刻分は、前掲注（6）『香川県史』または『新編香川叢書』史料編（二）（香川県教育委員会、一九八一年）における文書番号で示す。未翻刻のものは、香川県立文書館の文書整理番号で示す。

(8) 仁尾賀茂神社文書・覚城院文書・常徳寺文書は、前掲注（6）『香川県史』第八巻及び前掲注（7）『新編香川叢書』史料編（二）のいずれかに記載された文書番号で示す。未翻刻のものは、香川県歴史博物館の文書整理番号で示す。なお、宝寿院旧蔵文書も含めて、いずれの既翻刻文書も、写真版で読みを改めている。

(9) 寛治三年一〇月頼巖置文并浪打八幡宮放生会頭文写（『香川県史』片岡貞良氏旧蔵宝寿院文書八号）。なお文書名は改めた。

(10) たとえば「秋弘」は、「詫間御庄仁尾村秋弘名」と記されている（弘安元年閏一〇月藤原資治田島放状、『香川県史』仁尾賀茂神社文書一号）。

(11) 前掲注（9）の頭文は、寛治三年一〇月頼巖置文写と一緒に書写されている。また、頭文に記載（追記）された「正元」という年紀（西暦一二五九〜六〇年）と頭文との関係は、いまのところ不明である。

(12) 明徳二年八月浪打八幡宮放生会駕輿丁次第写（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書六号）。

(13) 貞治六年二月浪打八幡宮年中行事番帳写（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書五号）。

(14) 正中二年三月浪打八幡宮供僧祐喜申状案（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵宝寿院文書二号）には、

但今度彼供僧可為十二口之由雖被定置之、依所望以美濃房所被
十二人之外

新加也、

と記されている。なお、この点については、前掲注（4）国島論

文に詳しく言及されている。

- (15) 年末詳浪打八幡宮放生会御頭文(折紙) (『香川県史』片岡貞良氏旧蔵宝寿院文書九号)。

- (16) 前掲注(4) 国島論文。

- (17) 藺部寿樹「名主座の変質とその意義―讃岐国井原荘の冠尾八幡宮宮座―」・同「名主座の分布領域と讃岐国」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三五号掲載予定)

なお、詫間荘内の船越し八幡宮や松崎の木島神社には、現存民俗として「ミヨウニン(苗人)」の家筋が頭屋を勤めてきたと指摘されている。国島氏は、ミヨウニン(苗人)を名人すなわち名主とみている(前掲注(4) 国島論文)。苗がかつて名であった可能性は高い。しかし、後述する仁尾賀茂神社・仁尾八幡宮の事例のように、苗が一族的な結合を意味する可能性もある。いまのところ船越八幡宮や木島神社では、ミヨウニン(苗人)という名称のみしか手がかりがなく、苗の構造やその歴史性が明らかではないので、名主座であったという断定は差し控えたい。

- (18) 年末詳鴨社祭礼覚(『新編香川叢書』仁尾賀茂神社文書二九号)。

- (19) 「仁尾」は、しばしば「仁保」と表記されていた(万治二年四月由緒書断簡、仁尾賀茂神社文書整理番号外一―一六号。寛文七年九月中行事書、同文書整理番号外一―一〇・一五・二四号)。

- (20) 寛永一〇年三月鴨大明神祠官仁尾大夫詫状(『新編香川叢書』覚城院文書二五号) 及び同文書の写(同文書二六号)のいずれも、香川県歴史博物館に寄託されておらず、文書原本を見していない。

- (21) 文政一二年加茂社御頭心得惣記録(豎帳) (仁尾賀茂神社文書

整理番号一―二―二号)。なお、この文書と一連のものとして、いずれも文政一二年の加茂社御頭御引馬引受記録・加茂社御頭家具引受記録・加茂社御頭料理引受記録・加茂社御頭御餅搗引請記録・加茂社御頭神引請記録(いずれも豎帳。仁尾賀茂神社文書整理番号一―二―一号、同一―二―三―六号)がある。

- (22) 武田明「讃岐国仁尾の頭屋資料その他」(『民間伝承』一四巻六号、一九五〇年)。小松秀雄「苗制と頭組制の共存―香川県三豊郡仁尾町の祭礼」(『香川大学教育学部研究報告』第一部七六号、一九八九年)。

- (23) 延文二年三月御代官三郎次郎免田安堵状(『香川県史』仁尾賀茂神社文書一六号)、延文三年九月詫間荘領家某免田寄進状(同一七号)。

- (24) 嘉暦三年一〇月海有縄田地売券(『香川県史』仁尾賀茂神社文書七号)、応安四年九月代官某御燈田寄進状(同文書一九号)、弘安二年三月詫間荘領家地頭等連署充文(同文書二二号)、永徳元年七月詫間荘仁尾上村田島実検帳(同文書五号)、応永六年八月源助宗奉書(『香川県史』覚城院文書五号)、応永一五年六月藤原清長免島寄進状(『香川県史』常徳寺文書六号)。

- (25) 鴨社供祭人と仁尾浦との関係については、和田正夫「賀茂神社御厨讃岐国内海について」(『讃岐史談』二巻一号、一九三六年)、棚橋光男「嘉吉乱に関する一史料―讃岐国仁尾浦神人等言上状―」(『日本史研究』一九二号、一九七八年)、網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店、一九八四年、第二部第三章)、仁尾町誌編集委員会編『仁尾町誌』(仁尾町、一九五五年)、仁尾

町誌編さん委員会編『新修仁尾町誌』（仁尾町、一九八四年）、同編『新修仁尾町誌 補遺』（仁尾町、二〇〇五年）などを参照のこと。

(26) 応永二二年一〇月讃岐守護細川頼之書下写（『香川県史』仁尾賀茂神社文書二二号）。

(27) 和歌森太郎『美保神社の研究』（弘文堂、一九五五年、第一章第一節）。

(28) 『山形県史』第一巻原始・古代・中世編（山形県、一九八二年、九三七〜九四二頁）、戸川安章『櫛引町史 黒川能史編』（櫛引町、一九七四年）。

(29) 前掲注（3）蘭部「村落内身分の地域類型と丹波国山国荘」。

(30) 明和六年七月浪打八幡宮社領覚（香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書一五七号）。

(31) 未（元禄四年力）八月浪打八幡宮旧例書（香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書六四号）。

(32) 元禄四年八月御断申上覚写（香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書一一号）、未（元禄四年力）八月比地中村社人豊後・相模願書写（香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書一七一一号）。

(33) 前掲注（4）国島論文では、中世から宝寿院が別当（寺）と呼ばれていたかのように記されているが、中世文書には別当の呼称はみられない。別当呼称の初見は前掲注（32）元禄四年八月御断申上覚写であり、これ以降、宝寿院検校は別当または別当検校と呼ばれているのである。

(34) 正保二年八月浪打八幡宮放生会駕輿丁次第写（香川県立文書館

所蔵片岡氏収集文書一〇〇号）。未公表の文書なので、参考までに文書全文を掲出しておく。

八幡宮 駕輿丁次第之事			
一御輿 前	左 吉津 正元	アト	左 比地 包松
二御輿 前	右 同村 依国	右 詫間 吉久	
	左 比地 糸丸	左 詫間 久則	
三御輿 前	右 吉津 助宗	同	右 吉津 守永
	左 比地 安行	同	左 詫間 則包
	右 吉津 貞久	右 吉津 為時	
御餅御食配当之覚			
一拾枚	供僧中	一壹膳	供僧中
一拾枚	頭人衆	一拾枚	惣官殿
一拾枚	浜之町	一九枚	神子座
一壹膳半	神子座	一八枚	神人
一貳膳半	神人	一貳枚半膳	王子殿
一貳枚	ヤブサメ	一壹枚	則永

正保二歳八月十五日

義雄在判

(35) 文政一二年浪打八幡宮年中行事（香川県立文書館所蔵片岡氏収集文書二二一号）。

【付記】

現地調査・文書撮影にあたっては、浪打八幡宮、仁尾賀茂神社、覚城院、常德寺、香川県立文書館・嶋田典人氏、瀬戸内海歴史民俗資料

館・桑島哲治氏、香川県歴史博物館・上野進氏、三豊市教育委員会・保喜崇志氏、香川大学教育学部・田中健二氏ほか、多くの方々のご指導・ご高配をたまわった。厚く感謝申し上げます。

なお、本稿は、二〇〇七年度～二〇〇九年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）「中近世における名主座の分布領域とその外縁地域の宮座に関する村落類型論的研究」（研究者代表・蘭部寿樹）による研究成果の一部である。

【要旨】本論文は、讃岐国詫間荘（現香川県三豊市）における宮座について論じたものである。同荘浪打八幡宮における惣荘鎮守社名主座の成立を論じ、また名が早い段階から村落単位にまとまっていた点を指摘した。また荘内には準惣荘鎮守社的な仁尾賀茂神社宮座があり、それが京都鴨社の影響から畿内近国的な臈次成功制宮座であることを明らかにした。このように同一荘内に異なる類型の宮座が併存するのが、村落内身分地域類型の辺境地帯における特徴ではないかと問題提起をした。さらに惣荘名主座が個別村落の台頭におされて、近世は郷村頭役身分による郷村頭役宮座に変質したことを指摘した。

【キーワード】名主座 地域類型 準惣荘鎮守社 近世郷村頭役身分 郷村頭役宮座

【英文標題】

Area Types of Villager's Local Status and TAKUMA-NO-SHO (詫間荘)
in SANUKI Country (讃岐国) SONOBE Toshiki